

## 要 報

### 地震古記録慣用における一つの誤り\*

荒川秀俊\*\*

550.342

日本は地震国として世界でも名高く、また地震の古記録もよく収集刊行されている<sup>(1)(2)</sup>。これらの古記録はまた、地震学そのもののよい参考資料となっている。私は日本地震学界における古記録の使い方に一つの注意を与えてみたいと思う。

現在広く利用されている地震学の教科書ないし読物は、松沢武雄教授<sup>(3)</sup>、坪井忠二教授<sup>(4)</sup>、中村左衛門太郎教授<sup>(5)</sup>、本多弘吉教授<sup>(6)</sup>らの著書である。これらの著書には必ず安政元年11月4日5日の大地震のことが載っていて、安政の大地震というふうにも表現されている。しかし安政の大地震というものは逆説的にいえば存在しなかったのである。この両度の大地震は嘉永7年11月4、5日におこったものであって、この有史以来空前ともいわれる大震災のため、同年11月27日安政と改元したものである。したがって、1854年12月23、24日(西暦)の日本の大震災は存在し、嘉永7年11月4、5日の大地震はあったが、安政元年11月4、5日の大地震というのは、全く不当な言い表わしだのである。

以上のような不当な表現は単に、いわゆる安政の大地震ばかりでなく、他の地震の場合にも見られ、また松沢、坪井両教授の不注意ばかりでなく、今村博士などによっても慣用されたものであり、大日本地震史料もこの誤りをおかしている。東京天文台編集の理科年表<sup>(7)</sup>、地震の部でも襲用している。自分としては、やはり、不正確な表現はやめるべきでないかと思い、この一文を投げる次第である。

### 参 考 文 献

- 1) 震災予防調査会編：大日本地震史料(明治37年)。
- 2) 震災予防評議会編：増訂大日本地震史料、1~3(昭和16年~18年)。
- 3) 松沢武雄：地震(昭和8年、岩波全書)、地震学(昭和25年、角川書店)。

\* H. Arakawa: A Remark on the Use of Historical Earthquake Records. (Received July 22, 1959).

\*\* 気象研究所

\*\*\* Nagoya L. M. O.: Vibration of Ground Caused by a Dynamo (Received May 11, 1960)

- 4) 坪井忠二：地震の話(昭和16年、岩波新書)。
- 5) 中村左衛門太郎：地震学(昭和29年、内田老鶴園)。
- 6) 本多弘吉：地震学概要(昭和18年、岩波書店)。
- 7) 東京天文台編：理科年表(16世紀より前の分はユリウス暦とグレゴレオ暦との問題もある)。

### 発動発電機による地面の振動測定について\*\*\*

名古屋地方気象台

550.342

当台においては近く庁舎が新築され、レーダー電源室が新設されるので、発々による地面振動の地震計への影響を調べるために、名古屋大学地震教室に依頼して振動測定を行なったので報告する。

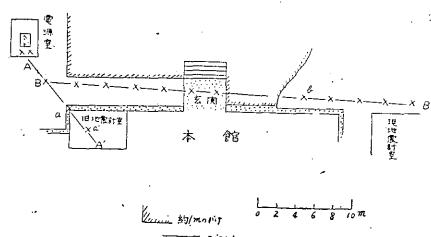
測定期日：昭和35年3月5日

使用器械：電磁地震計(速度を記録するもの)

変換器(HS-1) 周期4.5°/s, 感度0.43V/inch/s  
外部抵抗 500Ω, コイル抵抗  
215Ω

記録計 三栄電磁オシロ直結式

ガルババー (300 ~ 1 cm/mA, 30 ~  
52 cm/mA)



第1図

測定場所：第1図のとおり

#### 参考事項

発動発電機 ヤンマー製、防振装置なし、SKV  
エンジンベッド コンクリート深さ120cm、割栗  
石深さ30cm。

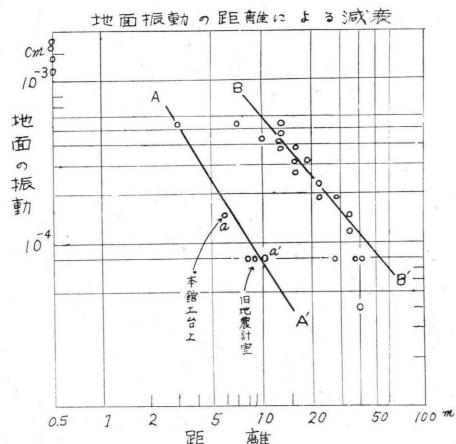
旧地震計室台 基礎の深さ約2m。

#### 測定結果

1. 記録を見ると、電源室床面もふくめ約0.07secの周期で、発々の発火音がとくに上下動に入るほかは、かなり複雑な振動をするが、距離が遠ざかると、0.03secくらいのわりに単純な正弦振動になる。
2. これらの記録を変位に換算し、距離による減衰の

様子を第2図に示す。減衰は始めゆっくりで第1図のb地点あたりから急になるのは地形の影響と思われる。本館土台上(a点), 旧地震計室(a'点)では振動は地面より約1けた小さい。

3. 発々運転中現地震計室のウィーヘルトの記録にまったく影響は見られなかった。



第2図

### 鹿児島県吉松町付近一帯に頻発した地震について\*

鹿児島地方気象台

550.342

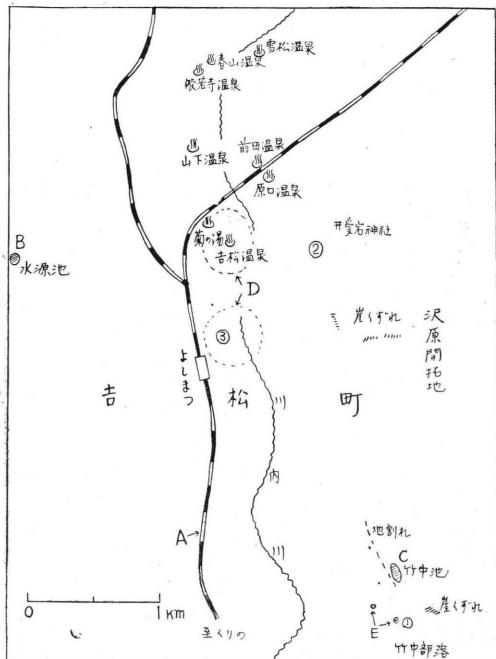
昭和36(1961)年3月16日以降鹿児島県姶良郡吉松町付近一帯に有感地震が頻発しているとの現地からの連絡があり、3月19日その状況を現地調査したので結果を報告する。

吉松町付近における地震の状況は別表のとおりであるが、とくに16日07時20分ころと18日15時22分ころの地震による被害、異常現象は下記のとおりであった。

(1) 鉄道床の移動: 18日15時の地震により肥薩線、吉松・栗野間(図のA地点)において約20mにわたり枕木14~15本が西から東へ5mmないし1cm移動した。

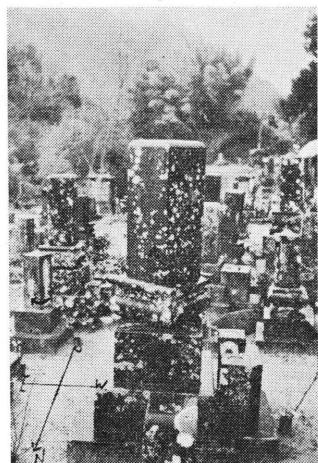
(2) 井戸および水源地の異常について: 16日07時の地震により水源池(図のB地点)の水は発震後約1時間で濃い乳白色にごり、30分後に黒色をおびた牛乳を

\* Kagoshima L. M. O.: The Earthquake Swarm in Yoshimatsu Town, Kagoshima Prefecture  
(Received May 11, 1961).



第1図

うすめたくらいにごりとなった。16日15時にはバケツに水を取ると底がわからないくらいにごり、17日05時には水をびんにとりにごりがようやく分る程度となり、17日夕刻清水に復した。また竹中池(図のC地点)の変化もほぼ同様であった。井戸およびわき水の異常については両地震により図のD地区の井戸が乳白色にごった。E地点のわき水は16日07時の地震では発震後10分で、18日15時22分の地震では約5分後、17時



吉松町愛宕神社附近の墓石移動状況  
(調査図②地点参照)